

# 母親のライフコースにおける子育て

— 母親の語りによる子育て過程と支援 —

Childrearing in the life course of mothers:  
Their talks on childrearing and supports

日比野 直 子

Naoko HIBINO

## 【問題と目的】

「子どもが生まれたからこそその苦しみもすごく多かったんですけど、でもそれ以上にすごくいろんな出会いがあって。いろんな心が使われたというか、考えさせられることが多くて。それは自分にとってとてもいいことだった。子どもが生まれたからこそ見えてきた世界があった。もし子どもが生まれていなかったら、自分はすごく狭い世界だったろうなと思うんですよ。だから子どもが生まれたことが自分の人生にとって大きな意味を与えてくれたのかもしれないって思う。最初子どもが生まれたことで人生を阻まれたって思った。子どもが生まれたことで自分は何もできない。でもそこでは阻まれたけど、他のものがいっぱい与えられたって、今ようやくそう思いますね。途中まではとてもそうは思えなかったけれど。」

これは、ある母親の自分の人生における子育ての意味についての語りである。

子育ては、一人の母親にとって、喜びをもたらすものであると同時に何らかの困難を伴うものである。否定的な気持ちと肯定的な気持ちが錯綜する子育てが、今日も進められて

いる。

母親がこのような否定的な感情をも抱きながら子育てをしているという実態を明らかにした牧野は、「子の現状や将来あるいは、育児のやり方や結果に対する漠然とした恐れを含む情緒の状態。無力感や疲労感あるいは育児意欲の低下などの生理的現象を伴ってある期間持続している状態あるいは態度」を育児不安と定義し、何らかの社会的支援の必要性を指摘した。また育児不安の反対概念として、「育児に対する自信や満足感、幸福感のようなもの」[牧野, 1982: 34-56] が考えられるとしている。牧野は、乳幼児をもつ母親の意識や生活上の問題点を分析し、今日の日本の育児をめぐる問題状況の一端を明らかにし、子どもにとって望ましい育児環境について考える道具として育児不安という概念を用い始めた。また、この時点で育児不安を産む要因として、夫婦関係のあり方と母親の社会的な人間関係のあり方があることを明らかにしている。

1980年代初頭に牧野がその必要性を指摘した子育てに対する何らかの社会的支援は、現在使われている子育て支援と同義であろう。しかしこの子育て支援という言葉や考え方

が、日本において一般的に用いられるようになったのは、1989年の「1.57ショック」を受け、国がその対策に乗り出してからのことである。政府は、共働き家庭における仕事と子育ての両立支援に重点を置いたエンゼルプラン（1994）を皮切りに、その支援の重点を、専業主婦家庭における家庭保育への支援を含めた全ての家庭への支援へと転換させながら、自治体や企業に対する行動計画を義務づけるなど力を注いできた。少子化が顕在化し、将来の日本社会の人口問題、財政的・経済的な危機意識から、子育て支援の必要性は社会の中で意識化された。

それ以来、関連分野の研究も盛んとなり、行政や民間レベルでの子育て支援の様々な試みも始まった。例えば大日向（1988）は、日本における、育児不安の背景として、「根強い性別役割分業観の存在」、「都市化による地域機能の衰退」、「核家族化による母親の子育て学習機会の乏しさ」などがあり、これらが「社会から孤立した母親による育児」という厳しい状況を余儀なくしていると説明した。つまり、育児不安は決して「母性」をはじめとする個人の資質の問題ではなく、子育てを取り巻く社会的な問題によって起きていることを明らかにした。そしてそれらの研究成果は、保育所・幼稚園・行政・NPOなどによる子育て支援の実践に影響を与えてきた。

現在までに行われてきた各自治体や民間による子育て支援の実践の内容は、「孤立化を防ぐための親子の出会いの広場機能」、「子育て負担の肩代わり機能」、「子育て方法の伝授機能」さらには、「母親のエンパワー機能」に至るまで多岐にわたっており、その一定の効果は母親や支援者によって評価された。

それと前後して、生涯発達の視点から親を研究する試み（柏木・若松、1994）や、子育て期に起こる葛藤の内容の検討（諏訪・戸

田・堀内、1998）、子育て期女性の自己の構造や子育ての意味づけに関する検討（榎田、2004；徳田、2004）、母親の育児期におけるライフコース選択を左右する要因の研究（小坂・柏木、2007）など、母親を個人として捉えたり、子育て期を人生の一部分と捉え、母親の人生の中での子育ての位置づけ方や葛藤の内容について明らかにする研究が行われてきた。しかし、研究の蓄積はまだ不十分であり、実際の子育て支援事業においても、それらの研究視点は重視されず、研究成果はまだ十分に支援に生かされていない。

このように、子育ての重要性が明らかになり、子育ての支援の普及が進む現在にあっても、保育や福祉の現場からの問題と課題の報告や、虐待等の痛ましい事件に関する報道があり、依然として、慢性的な育児不安を抱えている子育て世帯が多く存在していることは否めない。社会が子育て世帯の状況に意識を持ったことは一定の進歩であると評価しつつも、本当に必要とされている子育て支援とは何かを見出し、実践していく努力が求められている。

そのために重視されるべき視点の1つが、ライフコースに注目した子育て支援研究である。岩上は、「ライフコースとは、人生の軌跡、すなわち、誕生から死までの個人の全過程の道筋を意味している。それは、世代的に繰り返されるサイクルではなく、歴史の中で個人が歩むコースであることに強調点がおかれる」[岩上、2003：187-188]と述べている。また「ライフコース・アプローチは、①個人の人生を、生涯発達という観点から捉える、②個人の人生を、役割移行の過程としてとらえる、③個人の人生を、社会的、歴史的変動とのかかわりでとらえるという3つの特徴によって説明される」としている。個人化や多様化が進む現在、子育てを担う母親個人の成

育史も含めたライフコースという側面から子育て支援のあり方を検討することは有効である。それを解明するアプローチはいくつもあるが、誕生から現在そして将来への展望を含めた母親の語りを分析して、子育て当事者である母親の主観的リアリティを捉えることは子育て支援のあり方を検討する上で重要な位置を占める。

本研究は、母親を対象とし、親自身の成育史も含むライフコースの中での子育ての位置付け方、子育て観と親役割観を中心とした意識の側面と、家族生活と子育ての現状を明らかにすることを通して、有効な子育て支援のあり方を探ることを目的とする。

対象者は、子育て期において、母親が子育てに専念するという選択をした家族の母親に絞った。2011年の名古屋市の調査における就労していない母親は58.4%（育児休業・介護休業取得者を除く）であり、就労している母親は35.0%であった。子どもの年齢別にみると年齢が上がるにつれて就労していない母親は減少する（0歳児で65.5%、2歳児で61.9%、5歳児で50.0%）。就労していない母親のうち、すぐにでもあるいは数年以内に就労を希望するかどうか質問に対して20.6%は希望しないと回答している。[名古屋市, 2012: 3, 19-26]

この調査結果から、母親が子育てに専念する選択が一定の割合を占めていることがわかる。今後、女性の高学歴化、平均寿命の伸長、男女共同参画社会の推進、保育施設の拡充、とりわけ家庭の経済的問題等により、その割合は減少していくとしても、家庭で保育をしたいとする希望は将来的にもある一定の割合が存在し続けると推測される。そこで、専業主婦家庭の母親の意識と現状、そして将来の展望に関する語りに耳を傾け、できる限り母親の考えや状況を理解した上で、子育て支援

のあり方を見出したい。

## 【方法】

**研究協力者** 研究協力者（以下、協力者とする）は、名古屋市内の一つの幼稚園に通う子どもを持ち、協力者の募集に応じた母親10名である。募集は幼稚園の承認を得、幼稚園の掲示板によって行った。母親は、年齢が36歳から42歳、子ども（2～3名）の年齢は2歳から12歳であった。全家庭で父親が働き、母親は専業主婦であった。ただし1名は面接時点で月2～3回の嘱託勤務を始めており、もう1名は学生時代から継続して少人数を対象に実家で音楽教師をしていた。

**面接の時期・場所・所要時間** 2007年2月から8月までの間に順次行った。面接場所は協力者の希望に添って決定した。幼稚園応接室（5名）、大学研究室（3名）、協力者自宅（2名）であった。面接者は筆者で、各人に1回行った面接の所要時間は1時間30分から3時間であった。面接過程は、協力者の承諾を得て、ICレコーダーに録音した。

**面接の方法** 予備面接の結果を踏まえて決定した半構造化面接を行った。事前に記入を求めたライフコースシートの内容を確認しながら、面接者が用意したオープン・エンドの質問項目にそって質問をし、子ども時代から現在そして将来について語ってもらった。具体的な質問項目を以下の通りである。

- ① 自分の子ども時代に対する認識
- ② 育った環境の状況（両親の子育て観・性別役割分業観・きょうだい関係など）
- ③ 青年期の自分に対する認識
- ④ 結婚・妊娠期の実際の生活状況（移行に対する戸惑いの有無など）
- ⑤ 母親の退職の理由と夫婦の話し合い
- ⑥ 子育ての状況及び家族・親族・社会的

サポートの状況

- ⑦ 子育ての喜びと戸惑い、困難の内容
- ⑧ 戸惑いや困難への対処方法・知恵・工夫
- ⑨ 社会で起きている親子の諸問題に対する認識
- ⑩ 人生の時間に占める子育ての位置の認識
- ⑪ 子育て観・親役割観
- ⑫ 夫婦の役割分業の現状と認識
- ⑬ 将来展望
- ⑭ 子育てのある人生に対する認識

**ライフコースシート** まえもって、誕生から現在に至るまでの年・月・年齢・ライフイベント（主な出来事）を、A4版の用紙に記入するように依頼した。このライフコースシートの記入は、協力者が面接に先立ち、自分の誕生から現在に至るまでの道筋をあらためて概観すること、また現在の子育て期もまた人生の流れの中に位置づけられていることの意識化を意図し実施した。面接は、このライフコースシートに沿って子ども期、青年期等ある程度の区切りをつけながら進めた。また、分析過程において、ライフコースシートに書かれた内容から、実際に語られた事柄が起こった年代の社会状況の確認や本人の家族構成やライフイベントの移行の理解に役立った。なお、本研究における各期の区切りは以下のようであった。

- 1. 子ども期 出生から中学卒業まで
- 2. 青年期 高校入学から結婚まで
- 3. 結婚妊娠期 結婚から第一子出産まで
- 4. 子育て期<sup>注1)</sup> 第一子出産から
- 5. 将来<sup>注2)</sup>

**データの作成** ICレコーダーに録音した全ての語りを書き起こし、分析のデータとした。一事例あたりA4版17枚から22枚である。また、ライフコースシートを補助資料とした。

**分析方法** 事例ごとに、質問項目①～⑭の各項目について語られた内容を分類する一覧表を作成した。その表をもとに、子ども期から将来の各期で、影響を与えたと考えられる当時の社会的背景と重ね合わせながら、語りの内容を分析した。分析の焦点は以下の2点である。①母親のライフコース選択や子育て意識・行動に関与する社会的・文化的条件の特徴。②母親が何に支えられながら子育て役割をライフコースの中に組み込んでいくのか。

#### 注

- 1) 終了はいつまでという区切りは、協力者の親役割観を探ることや協力者自身の人生の時間の中での子育て期の位置を知ることが目的にして個々に尋ねた。
- 2) 面接者は区切りを定めなかった。子育て期と重なって考えるケースもあり得るし、自由に語ることににより、個々の人生時間の中での子育て期の位置が明確化することを期待したためである。

### 【結果と考察】

母親の語りから、ライフコースの中での子育ての位置づけ方・子育て観と親役割観・家庭状況と子育ての現状を明らかにしながら、母親のライフコース選択や子育ての意識・行動に関与する社会的・文化的条件の特徴は何か、また母親は何に支えられながら子育て役割をライフコースの中に組み込んでいくのかを見出していく。

## 1 母親の人生の時期における経験と思考

母親が分けたこれまでの人生の時期と将来についての多面的な語りを、5つの時期に区分してまとめる。母親の出生年には幅がある



が、参考のために10ケース全体が包含される各時期の始まりと終わりの年を示しておく。

## 1. 子ども期 1964～86年

### (1) 両親の子育て

協力者全員が性別役割分業家庭で育つ。母親が完全な専業主婦であったケースが6名、家業の手伝い1名、内職従事者2名、フルタイム勤務1名だが、どのケースも、子育て・家事役割は全面的に母親が担い、父親は稼ぎ手役割を担っていた。「超仕事人間だった」と言及しているように、父親の仕事は激務であり、関わってもらった記憶が少ない。父親が担った子育て役割の内容は、帰宅後の遊び相手やしつけ（箸の上げ下ろし、あいさつの徹底など）である。特に遊び相手になることが少なくしつけ中心であった父親は、怖い存在であり、青年期に至っては反発し父親からの独立を切望したという。それとは逆に、尊敬すべき存在として印象深いひとコマを回想する者もあった。

協力者である1964～71年生まれの母親達の子ども期は、高度経済成長期（1955～73年）の後半期である。サラリーマン家庭が主流になり、専業主婦が増加した時期であった〔経済企画庁，1997〕。稼ぎ手役割を担う父親たちは、厳しい勤務状況の中に置かれ、母親達は子育て・家事役割を一手に担い支えていた。また「家」制度の名残である第一子や男子を重んじる子育て観がみられ、特に父親が志向していた。また、協力者にとって、当時の母親像は決してマイナスイメージではない。むしろ父親より上手である（危機をうまく切り抜ける、上手に息抜きをする等）というイメージを持つ。さらに、学校帰りに在宅し迎えてもらったことを心地よい記憶として語り、子育て・家事役割を担う母親に対し、肯定的印象を持つ。この母親に対するプラス

イメージが以後のライフコース選択に幾分かの影響を与えていると思われる。

また、両親の子育て観に関する言及として、男きょうだいと比較し、強い方向付けはないとしながらも、特に母親からは、自己主張や自己選択を求められた記憶もあった。さらに、母親は自分がしたくてもできなかった塾、そろばん、ピアノ、習字を娘に習わせ、進学も推奨、大学を卒業した娘のことを誇りとしていたという。これらの語りの中に現れる母親の姿からも、母親が求める女性像や女兒に対する子育て観にも変容が見られている。

明治民法が規定した「家」制度は、1947年の民法改正により廃止されたが、親世代の意識に残存していたことは事実である。しかし、従来の性別役割分業観に加え、その性別役割分業観を超えた生き方への期待も同時に存在していた。つまり、時に矛盾を含んだ様々な期待が同時に混在する中で協力者は育てられてきた。

### (2) きょうだい関係

協力者が子ども期にもったきょうだい関係は、2人きょうだい（6名）か3人きょうだい（4名）間の経験であった。特に3人きょうだいの場合は、大人が介入しない3人の子ども同士の豊かな遊びの情景と、その中での微妙な人間関係について詳細に語られた。また、3人きょうだいの第一子であった協力者は、母親の仕事の関係でかぎっ子であり、時にきょうだいの世話や食事の準備まで担うことがあった。また別の協力者は、きょうだいが増えることによる年長兄の葛藤を鮮明に語った。これらの経験は、彼女らの「在宅し子どもの相手を存分にできる母親でありたい」という思いを強くし、また、第二子誕生に際し、第一子に細心の注意を払おうとする自身の子育てにつながっている。

### (3) 子ども期の自分に対する認識

プラスに語るケースとマイナスに語るケースがあった。その違いは、親をはじめとする身近な大人に肯定的に受け入れられていたか否かの記憶に基づいていた。また、趣味や考え方、行動様式など、この時期に得たものが自分の中に生きているとし、子ども期の遊び体験や人との交わりが人生において重要だと語った。また、自分が親となり、両親をモデルに子育てをするが簡単ではないという実体験から、当時の父親・母親の置かれていた立場や状況を加味し、子ども時代に抱いていたマイナスの印象を更新しながら語った。

協力者は、子ども期の自分に対する認識について、親やきょうだい、先生、友達など身近な人との関係性の中で語った。それは自分の人生の中で、子ども期における身近な人との関わりが人間形成に重要であったと実感していると思われる。また、現在子育て期にある自分が親としてわが子に影響を与えうる存在であると言う点で、大変関心が強い事柄であると思われる。一人の母親は、「やってもらってよかったことはやってあげたいし、やって欲しかったけどやってもらえなかったこともやってあげたい」と語った。自分の受けたプラスはプラスとして受け継ぎ、自分の受けたマイナスをわが子にはプラスにしたいという思いを強く持ち、実際の子育てにも反映されている。

## 2. 青年期 1980～99年

### (1) 高校時代

高校時代については、とても楽しい時期とし、クラスの団結の経験や、クラブ活動に熱中し力を合わせて成し遂げた達成感等について生き生きと語った。まだ、親の庇護下にあるが、中学時代よりも生きる世界に拡がりを実感できる時期であった。また一方で、ワン

マンな父親に反発し、実家から出るため他県の大学進学を目指すなど、庇護からの脱出を試みる時期でもあった。また、具体的な進路について、親と折衝しながら決定していくこの時期は、親の持つジェンダー規範を再認識する時ともなった。ある協力者はそれまで学校でも家庭でも男女分け隔てなく扱われてきたが、大学進学の資金工面に際し、父親が「将来的には女の子だから幸せな結婚をしてくれればいい」と言ったことが忘れられないという。

高校時代は、自立して歩む人生に大きな期待感を抱く時期であった。その一方で、親の持つジェンダー規範の再認識等、現実を目の当たりにすることもあった。経済的にはまだ親の庇護を離れるわけにはいかないが、精神的には依存から自立へ進む時期に来ていた。

### (2) 大学時代

協力者は高校卒業後、4年制大学（7名）、あるいは短大（3名）に進んだ。時代はバブル経済期であり、「戻れるのなら戻りたい時期」と表現している。また、初めての一人暮らしを経験した母親は、解放感とともに寂しさを感じ、家族のありがたみを再認識したという。またコンパの誘いも多く、「華やかな時代だった」と表現している。アルバイトで稼いだお金を自由に使ったり、海外へと行動範囲を広げる者もいた。

2004年の進学率は、男子は大学進学が49.3%で短期大学進学が1.8%、女子は大学進学が35.2%で短期大学進学は13.5%である。1983年の進学率は、男子は大学進学が36.1%で短期大学進学が1.8%であり、女子は大学進学が12.2%で短期大学が19.9%であった（内閣府、2005：271）。協力者が入学したのは1983～89年である。女子の大学進学率はまだ低く、多くが短期大学に進学する時代であった。

大学時代は自由を満喫できる時代であり、自己実現のために自分の力と時間を使い手ごたえを感じる生活を、母親達は生き生きと語った。「楽しかった！結婚しちゃってからが結構大変でしたね。苦しみに入っていく」、「自由に楽しくやってきた時期があるから、今家にいて子ども中心でも気にならないのかもしれない」と、子育て期にある現在の生活と対比して表現している。

### (3) 就職

就職に困難は少なかった。しかし、施行後間もない男女雇用機会均等法に対する職場全体の戸惑いを入社後に感じたという。ある母親は、与えられた仕事内容に明らかな男女の不平等があったとし、別の母親は会社初の女性技術職として採用されたが、前例がない為に周りも自分も戸惑ったと語っている。

母親達は、就職の経験を社会勉強の時、または、子育てや家事に煩わされず仕事や余暇活動に没頭でき充実していた時としている。一方で、与えられた仕事は、単調でやりがいを感じなかったなど、自己実現や自己成長を望めない仕事の継続に違和感を持ち始めている。

この時期、学生時代の同級生や、就職後の余暇を通じて出会った男性と結婚を決意し、結婚あるいは出産退職をした。協力者は、1987～94年に就職し、1991～2000年に結婚した。

協力者が青年期だった1980～99年の時代的背景として、バブル景気（1980年代後半～1990年代初頭）とバブルの崩壊（1991年10月頃～。深刻に受け止められるようになったのは、1993年～）があった。1989～96年まで金融系の会社員であった母親は、仕事でもプライベートでも特にその移り変わりを感じ取ったと語った。一般的に、どの世代でも、学生

時代を自由・楽しい時期と表現する傾向があるが、特に、協力者がこの時期を一様に華やか・自由・遊んだ時期とするのは、青年期がバブル景気と重なり、その後の退職結婚がほぼバブルの崩壊期と重なることから、青年期がより自由で華やかだったと感じられるためかもしれない。

また、就業していた時期は1985年に日本が「女性差別撤廃条約」を批准し、女性差別を排除するための国内法や制度の整備や改正（国籍法改正、男女雇用機会均等法制定、男女共通必修家庭科への転換）が行われた頃である。しかし、歴然とした男女の不平等が存在する等、職場の体制や考え方が法の理念に十分に対応していない現状があった。さらに女性側の意識としても、仕事役割を継続的に自分のライフコースの中に取り込むことに違和感を覚えていた。

## 3. 結婚・妊娠期 1991～2001年

### (1) 退職

結婚を機に退職（6名）、出産前に退職（2名）、残り2名は、第一子が1歳9ヶ月と2歳11ヶ月の時に退職した。いずれの場合も退職の理由は、自分の希望だとしている。退職の時期別に退職の理由と退職を決める際の夫婦の話し合いについてみていく。

**結婚退職の場合** ある母親は、「寿退社が夢だった。母のように帰ってくる子どもを家で迎えてあげられる母親になりたかった」と語る。結婚退職というライフコース選択の背後には育った家庭というモデルがある。また、「自分の希望」とする退職の決断は、夫の考え方や勤務地の問題、同じ職場であるからこそ生じる問題など、実は様々な条件が関与していた。また、仕事を続ける意欲もなかったと語った。前項の2. 青年期の就職に関する語りにおいて、職業経験は社会勉強であり、

一つの良き経験として認識している点からも仕事役割は通過点であり、継続的に自分のライフコースに取り入れることに違和感を持つ点は、結婚退職を選択した母親の意識に共通していた。

退職にあたっての夫婦の話し合いはないに等しい。母親の「自分の希望」である結婚退職というライフコース選択に対し、パートナーである夫側も賛成で、異を唱える必要がなかったようだ。結婚退職を選択した夫婦双方が性別役割分業志向であった。

**出産退職の場合** 出産退職の母親は、就労状況に合った保育施設の未整備や実家が遠方だという現実、そして自分の持つ親役割観を背景に仕事役割と子育て役割を天秤にかけ、今は子育て役割を担うべきだと、ライフコース選択をしている。同時に、退職の時点で子どもが成長後いずれ働くという考えもあった。出産退職選択の母親は、仕事役割を担う志向であると同時に子育て役割を優先すべき時期があると考えている。子育て期は期間限定的で、いずれは仕事役割を担う時期が来るという見通しがあった。

退職についての夫婦の話し合いは、特になかったケースと、夫は共働きを志向していたが、自分は子育てを優先したい旨を伝え、退職に至ったケースがあった。

**第一子3歳未満で退職の場合** この母親達は、働く意志があった。しかし継続しにくい職場環境、夫の子育て・家事参加の状況、時間の余裕のなさ、保育施設が未整備のために仕事役割か子育て役割を選択せざるを得なくなり、子育て役割を選択した。この退職に際する夫婦の話し合いはなかった。互いに多忙な生活ぶりからも、話し合う時間も取れない状態であったと推察される。夫は、妻の意志を尊重しているが、両立を可能にしたかもしれない夫の子育て・家事協力はなかった。

総括すると、協力者は、1987～93年に就職し、1991～2000年に結婚、その後出産した。これらの時期は、「女子差別撤廃条約」批准（1985）、「男女雇用機会均等法」制定（1985）、「育児休業法」（1991）、「ILO156条約」批准（1995）の時期と重なっている。家庭的責任を男女が共に担う社会の実現を目指す理念が広がっていたが、現実の人々の意識の中には、性別役割分業観が色濃くあった。そのような中、協力者は、退職の決断の理由や時期、背景には差異があるが、このライフコースを自己選択したと認識していた。その決断に際しては、子育て役割と仕事役割の両立は不可能あるいは困難だという判断が共通してあった。この両立困難という判断の背景には、前世代からの性別役割分業観と、理念実現のモデル不在であったと考えられる。

## （2）結婚後の家庭生活

結婚後の家庭生活に関する語りでは、夫婦関係、妻の孤独、不妊に対する不安、主婦役割についての言及があった。

まず、夫婦関係では、別々の環境で育ってきた二人の意思疎通の難しさがうかがえる。結婚・妊娠期は、夫婦の関係も構築の途上にある時期である。また、夫は新婚当初から仕事のために夜中に帰宅するか、夜勤など多忙な生活をしていた。よって仕事を辞めた妻は、一日中家庭で1人で過ごす生活となった。また、結婚と同時に遠方への転居をとまなう場合、その孤独感はいっそう強まった。そして、結婚後しばらく妊娠しないと、不妊への不安が一気に広がる。結婚時のライフコース選択において、子育て役割に重きを置いたため、その人生の段階がスムーズに進行しないことに不安を持ちやすかった。

また、専業主婦の生活は合わなかったと語る母親もいた。家事、ご近所付き合い、井戸



端会議…。今までに学校生活などで積み重ねてきた事が役立たない感覚や自分が自分でなくなるような感覚に襲われるなど、専業主婦として生きることに対する戸惑いは深刻だったという。

結婚期の妻側の役割移行には想像以上に大きなストレスがかかっていた。ストレス状態解消として、夫と話すかぶつけていたという。しかし、夫の帰宅が遅いことが常態化している家庭も多く、やがて、アルバイトや習い事を始めている。やるべきことがあり、コミュニケーションでできることで、孤独な主婦生活から脱出し、社会において自分が確かに存在していることを認識でき救われたと語る。

「孤立した子育て」が育児不安の一つの要因としてあげられているが、結婚から妊娠に至る時期に、退職した妻が「孤立した新婚主婦生活」を経験していることが確認された。さらに夫との関係も構築途上にあるが、夫は仕事役割の遂行にエネルギーを注ぐ時期でもあるため、満足のいく意思疎通が叶わない状況に置かれる。後の子育て期における言及で、ある母親は「頼るべきは遠くの親戚よりも近くの他人」と、転勤族の妻同士で助け合い子育て期を乗り越えてきた事を誇らしく語っている。この結婚当初の孤独な経験により、子育て期にも対応できる知恵や工夫を得ていたのかもしれない。

#### 4. 子育て期 1994年～

##### (1) 子育ての状況

協力者が子育て・家事役割を、夫が稼ぎ手役割を担っている。うち2名は在職期間があったが、その間も家庭においては子育て・家事役割を担っていた。里帰り出産をした母親は、出産当初は、親から何らかの子育て・家事サポートを受けていたが、その後は核家族で子育てをしている。夫の帰宅時刻は、不

定期(3名)か、10時以降(4名)の場合が多く、平日の子育て・家事は一手に母親が担っている。

##### (2) 子育て期における戸惑いや困難

子育て期における戸惑いや困難は、まず、出産後の子どもの発育や健康の心配、夜泣きや母乳の問題、子育ての仕方のわからなさがある。また、子どもの発達障害や気質による育てにくさやそれに付随する問題、きょうだいの子育てがあった。さらに、実及び夫の母親の言動、夫婦関係、近所との関係、夫の親との同居の問題、転勤・転居の問題、自分自身の問題があった。また、学齢期に差し掛かると小学校受験等子どもの将来に関わる問題も生じていた。

**初めての子育て** 夜泣きや母乳の問題など、乳児期の子育て特有の大変さを皆経験している。ある母親は、なかなかおさまらない夜泣きに「どうして泣き止まないの？」とわが子に強く当たってしまったという。また別の母親は、置くと泣くので一日中抱きっぱなしの生活だった。しかし、その語りに深刻さは感じられず(当時はもちろん深刻だったとしているが)、むしろ母親になったばかりのよき思い出として語った。当時は深刻だった事を、懐かしい思い出として語る理由の一つとして、子育て経験による学習で、現在の子育てにある程度の自信を持っていることがある。それは、夜泣きのエピソードに対し、当時は、一度の授乳は200mlにすべきということ優先し、もっと欲しがる子どもの状況に添うことをしなかったためという説明に代表される。現在はマニュアルに頼らず、子どもの状況に合わせられていることや、同じ状態がずっと続くわけではないという子育ての見通しを持っている。

**きょうだいの子育て** 協力者の子どもの数

は、1人（2名）、2人（6名）、3人（2名）である。第二子の出産は第一子出産後1年半～6年の間であった。

きょうだいの子育ての戸惑いや困難は、まず夫の帰宅までのほぼ一日を家庭において母親1人で2人以上の子どもの世話をする大変さである。年子の乳児の世話の大変さや、第二子誕生直後から第一子が攻撃的になり目が離せなかったことが語られた。また、さらに第二子の誕生で第一子に寂しい思いをさせたくないという思いや、きょうだいの1人が発達障害を持つために他の子ども達が我慢をしている部分が多いのでフォローを心がけるなど日常的に細やかな配慮が行われていた。これは、2.子ども期にあった、きょうだい関係に関するマイナスの印象を自分の子育てではプラスにしようという思いを強く持つためと考えられる。また、試行錯誤の末、きょうだいの子育てがうまくいかない場合、自己評価を下げ追い詰められている。このように、第二子誕生に始まるきょうだいの子育ては、物理的な大変さと共に、母親達に精神的な葛藤をもたらししている。

**発達障害を持つ子どもの子育て** 発達障害を持つ子どもの子育ては困難も多いと語った。また、我が子が発達障害を持つと診断されることはつらいが、子育てのしにくさが、自分のせいではなかったことに安堵したという。しかし、周りに子育てのモデルがなく、不明な点が多い。さらに共感し合える人が得られにくいことから、幼稚園や小学校の母親集団の中では隠し、「普通にやっているように話すしかなかった」という。別の母親は、積極的に周りの人達に悩みを打ち明けたことで理解を示す人が増えたが、社会の中にある無理解の壁は切実な問題だという。

**住宅問題** 2人の母親は深刻な近所住民との騒音トラブルを経験している。ともに発達

障害を持つ子どもを育てているが、ポストやドアに中傷の貼紙をされた経験や、苦情メールを受け取るなどの経験がある。わが子は「奇声を発することがあったから」とも語っているが、果たしてこれは発達障害特有の問題なのだろうか。

インターネットで、「騒音 子育て」で筆者が検索すると、集合住宅に居住する子育て世帯が抱える一般的な問題であることがわかった。「夜泣きを始めたならドライブに連れ出す」「フローリングの部屋にはカーペットを二重に敷く」「昼間はなるべく外に連れ出し走り回らせて疲れさせ家で早めに寝かせる」などの工夫が紹介されていた。騒音対策が重大な問題であることがうかがえる。また、「同じ世代の人が住むマンションを選びお互い様感覚でストレスを感じずに暮らす」というコメントもあった。さらにマンションの管理会社からは「騒音の問題は、人間の感情が絡む問題である。日頃からの近所の人間関係作りが鍵である」というアドバイスも寄せられていた。これらから、現代の子育て世代を取り巻く住環境の実態、地域の連帯の難しさうかがえる。

**転勤・転居の問題** 夫の転勤は、培ってきたつながりや暮らしの継続を分断する。ある母親は、産後に社宅の友人や実家の母親にサポートを受けて生活が落ち着き始めた矢先に転勤が命じられた。知り合いの全くいない土地に転居となり、生後7か月の子どもと2人きりの生活を余儀なくされた。また、第一子の妊娠期間から6歳までの間に4回もの転勤を経験した母親もいる。「私の場合は引越して分断されているんですね」とインタビューを転勤ごとに区切り語ることを希望した。夫はともに企業勤務である。転勤は夫にとっても大変な出来事であり、帰宅時間が連日深夜になるなど、厳しい就業状況に置かれた。こ

これらの語りから、雇用者家庭の暮らしに対する企業の関心度の低さも垣間見られる。

**自分自身の問題** 自分の問題として、まず自分の体調不良時はもちろん、普段から乳幼児を抱えて、子育て・家事役割が思うように果たせないことを語った。また、主婦役割、母親役割中心の生活に馴染めない感覚を持つなど、子どもの誕生による生活や立場の変化に適応しにくい状況がある。そして、この状態が永遠に続くのではと落ち込み、自信喪失の状態になってしまうこともあった。さらに、公園デビュー、幼稚園の母親付き合い等、子育てをめぐる人間関係の葛藤も加わり、自分自身が精神的に揺れやすい状態であった。

榎田・諏訪（2002）は、家庭で子育てをしている母親の悩みやストレスの実態を明らかにする調査をしている。その結果、子育て期の母親の「つらいこと」は育児そのものから生じているように見えて、自分の生き方への悩みなど母親を取り巻く子育て以外の悩みが関与していることを明らかにした。それを踏まえ、「育児ストレス」として把握するのではなく、「育児期ストレス」として広く捉え、子育て支援の在り方を検討する必要があると指摘している。

今回、協力者によって語られた子育て期における戸惑いや困難の内容もまた、子育て自体の問題だけではなく、夫婦関係の問題、親の問題、近所との関係、転勤・転居に伴う問題、自分自身の問題など多岐にわたっていた。

### (3) 受けた子育てサポート

サポートを受けた相手として、親、夫、子育て仲間（サークル、社宅の友人、幼稚園のママ友達）、中学・高校・大学の友人や先生などをあげた。転居により実家と離れて暮らしている母親は、第一に子育て仲間を挙げた。また、その他、育児書・本、公共的な場にお

けるサポート、子ども・子育て経験、工夫・知恵、信仰があった。

**親・きょうだい** 親・きょうだいから受けたサポートの内容は以下の通りである。自分の親及び夫の親からは、出産前後など緊急時の子育てや家事、就労時の子育てなど具体的な子育て・家事サポートを受けていた。また、精神的なサポートも受けていた。またきょうだいによるサポートは、就労時の子育てサポートや相談であった。

里帰り出産をしたのは、9名である。早産で入院中の子どもに授乳に通う必要があったケースや産後の体調不良が長く続いたケース等、実家で生活面のサポートを受けられ助かったと語った。また第二子以降は、家族での生活を優先するために里帰りせず、夫の母に子育て・家事の手伝いに来てもらったというケースもあった。里帰り出産は日本において一般的な出産慣行である。しかし今回、協力者が里帰りするか否かの選択と実際の生活状況からも、それぞれの家族によって選択されるものとなりつつあるようだ。また、就労時の子育てなど、親からのサポートに期待は高いが、高齢や健康状態そして心情的な葛藤をとまなう等限界もある。また、母親の実家にサポートを受ける傾向があるが、子どもの入院時など双方の親が交代でサポートするなど、実家と婚家の垣根も低くなっていることも読み取れた。

**夫** 夫からは、日常の子育て・家事、外出時や就労時の子育てなど具体的な子育て・家事サポートを受けていた。また、相談相手や理解者としての存在、安心感などの精神的なサポートも重要であった。研究協力者は専業主婦を選択したが、夫に対し何らかの協力を期待しており、不満を持っていた。

協力がうまくいっていると話すケースは、短時間でも子どもと接するなどできる範囲で

の子育て・家事をする、あるいは妻の家事の状況などに不平を言わない、妻の心配や愚痴などを聞くなど協働感覚を得られている関係である。この場合、妻に満足感をもたらすものは、自分自身が夫に理解されている実感であり、子育て役割を自分一人で担っているのではないという安心感につながる。

あるきっかけによって満足のいく協力が始まったケースでは、完全なる分業から家族として限界に達し、互いに歩み寄る関係性へと転換させた、第3子が生まれ協力すべきだと夫が気づき変わり始めた、妻が仕事のため長期間家を空けたことにより父子の関わりが生まれ変化したのである。これらは、母親が夫の協力の現状に不満を持っていたが、何らかのきっかけにより夫の具体的行動が変化し、母親が満足しているケースである。

これらから、夫の精神的サポートと具体的なサポートを母親は望んでおり、夫が子育て・家事役割の一端を担おうとする自発的な意識転換の機会を得ることが重要であることが分かる。夫の意識転換には、家庭を大切にする職場の仲間との出会いや、モデルとなる存在が重要である。また、具体的に子育てに関わるための学習の機会と実践の機会の保証も必要である。

ある母親は「一時期、夫の協力や理解が全くなかった時、当てにせずなんでも一人でやろうとがんばったことがあった。でも、それは虚しく悲しいものだった」と語っている。母親達にとって、夫は最も頼りにしたい存在である。これらを受け、各家庭の状況に応じた夫婦の協力関係の構築を支えようとする視点もまた、子育て支援において欠かせないと思われる。

**育児書・本** 初めてのことでわからない子育て方法を知るため、情報を得るために育児書や他の本は重要なものである。ある母親

は、第一子の子育てでは何度も開き、「○○をやりましょう」という育児書に記述を忠実にやってきたが、次第に苦しくなった経験を語った。また発達障害を持つ子どもの母親は、突発的な対応が必要な際に、予約が必要な児童相談所や医療機関は頼れず、本を参考にするしかないという。

育児書は、初めての子育ての際、母親が方法を知るために有効である。また、何度も読み返したり、必要な時に必要な情報を得られる。しかしかえって縛られ苦しい思いをしたり、子どもや親の個人差に対応しきれないなどの限界もある。天童（2004）は、1990年代以降、専門家が教授する形式の育児書や育児雑誌が敬遠され、母親達が子育ての本音や悩みを投書し、精神的に支えあう機能を持つ育児雑誌が支持されるようになったとしている。そして今後、インターネットによる情報収集や意見交換などが主流になるであろう。インターネット文化の子育てにもたらすプラスとマイナスも注意深く見守る必要があると思われる。

**子育て仲間** 母親たちは、子育て仲間を自宅、保健所主催の子育て広場、子育てサークル、幼稚園、通園療育施設などで得ていた。

子育て仲間は、情報交換や素朴な疑問の分かち合いができる関係であり、病気の際に助け合うなど緊急時の子育て・家事サポートを互いにする関係である。

会話や行動を共にするうち、やがて、心を許し励まし合える関係となり、自分の居場所となると語った。母親たちは、顔見知りというレベルではなく、ある程度心を許し話することができる親密度を持った関係を子育て仲間としていた。また、子育て仲間から受けるサポートは、他から受けるサポートのように一方的ではなく相補的であることが特徴である。

さらに、先輩お母さんとの交流は、子育て



に見通しを持たせるアドバイスを得る存在として重要だった。また、自身の経験に基づいた子育てサポートには何度も救われたという。ある母親は「危険になってくる」と、子育て中の精神状況を説明している。危険とは育児不安や虐待に陥りやすいことを指している。それは誰にでも起こりうることであり自覚的であるという。その感覚を体験しているからこそ、「初めての子育てに今必死のお母さん達に、その苦しい状況が永遠に続くのではないことを伝えてあげたい」と語った。原田(2006)は、1980年の「大阪レポート」と2003年の「兵庫レポート」の結果を分析し、この育児不安や虐待に関与する条件を明らかにしている。育児不安が強く子育てにおけるイライラ感を強く持つことや体罰は、「イメージしていた子育てと現実の子育てとのギャップを感じる」と関係していた。また、このギャップを感じることを少なくするには、母親になる前の「子どもとの接触経験」や「育児経験」が大きな効果を産むが、これらの経験は減少傾向にあることを明らかにした。

この母親になる前の「経験」の減少の補てんとして、先輩お母さんのサポートは何らかの効果があると思われる。

**公共機関によるサポート** このサポートとして、医療関係者、託児施設・保育所、公的機関による支援事業、習い事があげられた。

現在、出産のほとんどは、医師や看護師、助産師の介在によって行われる。そのため、出産前後、母親たちは医療関係者によって、子育てに必要な知識や情報を得ている。その一方で、産後体調不良が続いた母親は、「産後は動くべきだ」とする一般的指導を受け、逆効果だったと語り、個人差への配慮に欠ける医療関係者がいると指摘した。保育所は就労形態に合わない場合があり、託児施設は質にばらつきがあり、どこにでも安心して預

けることはできないようだ。公的機関による支援事業<sup>注1)</sup>に関しては、「のびのび子育てサポート事業<sup>注2)</sup>」や「児童館の子育て支援の催し<sup>注3)</sup>」、保健所主催の「子育てサロン<sup>注4)</sup>」に対する言及があった。「のびのび子育てサポート」は突発的なニーズに応えられずに利用しにくいなど改善の余地はあるようだ。しかし、保健所主催の地域の「子育てサロン<sup>注4)</sup>」のような第一子の親子対象の出会いの場の提供に関しては評価が高かった。また、子育てサークルは、自分のニーズや状況に応じて選べる点がよかったという。

また、習い事の場合が母親の求めるサポートを果たす役割があることも示された。ある母親はスポーツジムのベビービクス<sup>注5)</sup>の無料体験に参加し転居後の地域の情報収集に役立ったことを、また別の母親は、幼児教室の先生自身の子育て経験に基づく的確なアドバイスが役立ったと語っている。

### 公的機関による支援事業が有益となる要因

母親たちが公共的なサポートとつながる動機は、自分にも子どもにも「ベビーカーで行ける範囲の友達がほしい」というニーズが高まることにある。保健所の主催する「子育てサロン」は学区ごとに催されるためにそのニーズに合致している。

こうした公共的な場におけるサポートは、出会いを求める気持ちを持ち、情報収集し連絡を取り出向くという一連の行動を起こす母親にとって有益である。一方でその条件のいずれかが欠けた場合はうまく機能しない可能性がある。ある母親は児童館で行われた子育てサークルに出向いた。しかし、あまり積極的ではなく、社交辞令的な会話をする顔見知りでは出来たが、心を許して話すには至らなかった。また、別の児童館の集まりに参加したが、我が子と他児を比較して不安を抱えたケースもあった。2006年6月に筆者は、名古屋

屋市守山区の子育て支援部署の担当者への聞き取り調査を行った。担当者は、全員対象の乳幼児健診の場で、子育てに対する不安や問題を抱えている家庭の発見と必要なサポートを提供に努めているが、この健診に欠席の家庭もあると語った。課題は、リスクを抱えながら子育て支援の様々な事業に不参加の家庭への支援だと認識していた。全世帯の個々の親子の特性や状況に応じた対応が求められている。

**子ども・子育て経験** 子育て役割の対象である子どもの存在や、子育て経験そのものが子育て期にある母親の精神的サポートとなっていた。

母親達は、寝顔や子どもの言葉に喜びを感じ、子どもの成長の過程に立会い関わることに幸福感を感じている。また、確実に手がかからなくなる実感は、子育てで負担感を軽減し、自分の子育ての成果と受け取れるものとして意義深く、母親の自己肯定感をも高める効果がある。ある母親は、第一子が1歳半になるまでは苦しかったが、第二子以降の子育てで育児書を開いたこともないと語っている。他の母親たちも、第二子以降の子育てでは、きょうだいの子育ての難しさは語るが、第二子自身の子育ての難しさに対する言及はなかった。前出の原田の調査の他の分析結果によっても、育児不安やストレスを軽減する「子どもの要求の理解度」は、第一子より第二子、第二子より第三子と出生順位が後になるほどよくなっていることが明らかにされている。子育て経験もまた、母親自身の子育てをサポートする要因である。

また、わが子は手がかからず、育てやすかったと語った母親もいた。Thomas & Chess (1977) は乳児の気質を大きく3種類に分けている。すなわち、扱いにくい (difficult)、扱いやすい (easy)、立ち上がりが遅い (slow

to warm-up) である。また、森下・森下 (2006) は、子育てにおいて子どもの気質は母親の行動特徴と養育態度に影響を及ぼしているとしている。このことから、子どもの「扱いやすい」気質は子育てで負担感を軽減するものであると考えられる。

**工夫・知恵** 母親は日常生活の中での工夫として、リフレッシュする時間を持つことと、完璧を目指さないことをあげた。夫に子どもを預けての外出や、嘱託勤務に就く時間、好きなラジオを聴く等の時間は自分を取り戻す時間だと語った。また、ある母親は通信制の大学に編入し卒業、託児付の講座に参加するなど学ぶ機会を持ってきた。子育てを離れ、個人的に充実した時間を持つことは母子ともに有益であったと語った。また、子どもの昼寝中の読書の時間など、短時間であっても有益であり、その時間を意図的に作り出すようにしていた。子育てから離れ自分のペースで行動できる時間を、母親たちは求めていた。また、専業主婦は、周囲から子育て・家事役割を担うことを期待される。しかし、役割を全うすることは難しい。そこで母親たちは主婦としての完璧を目指さず、子育て役割を優先することを公言することで自分を追い詰めない工夫をしている。

#### 中学、高校、大学時代からの友人・先生

ある母親は、中学・高校時代からの友人や先生は、自分にとって変わらぬ居場所だと語った。また、成人した友人達の人生は、自分の経験を超えた生き方のモデルであり、自分自身の価値観を柔軟にさせるものだという。自分の人生も肯定的に捉え直せるとともに、子育てで重要にすべきものは何かというヒントを与えられると語っている。

**信仰** 信仰もまた、母親を支える場合がある。結婚後に多くの困難を抱えてきたある母親は、「この厳しい状況をくぐりぬけ、逃げ

なかった理由。それは、やはり信仰だった気がする」と語った。結婚妊娠期、子育て期において母親たちは、新たな主婦役割や母親役割の獲得に伴う問題と同時期に生じる多様な問題を抱え、葛藤状態に置かれる。自分とは何者かという根本的な問いに向き合うものもある。普遍的なものに守られ導かれる確信を持つことができる信仰は、そのような母親達を支えていた。

**発達障害を持つ子どもの母親が受けた子育てサポート** 発達障害を持つ子どもを育てる母親は、保健所の健診から専門医の受診を勧められ診断、療育につながる経緯を語った。診断名がつく事はショックだったが、子育てがうまくいかないのは自分のせいではなかったと自己評価を回復し、改めて子どもに向き合う意欲を得た。

その後のサポートとしては、療育機関、病院等であるが日常生活で起こる疑問や困難にタイムリーに応える機関ではないため、多くは、本を参考にしながら試行錯誤し家庭内で解決するという。またある母親は、子育て仲間によるサポートを挙げた。障害は一般的に共感されにくいいため、孤独になりがちであったが、思い切って自分が抱える困難について語るにより状況が変わったという。しかし地域や学校の障害に対する無理解、無関心は存在し、不安、困難を増幅させたという。

これらの語りは、当事者に対しての専門家によるサポートの充実と共に、すべての障害に対する理解を進め、障害のあるなしに関わらず一人ひとりが自分らしく生きることができる偏見のない地域社会づくりを視野に入れた子育て支援が求められていることを示している。

#### (4) 子育て期はいつまでか

**時期と親役割観** 子育て期はいつまでかと

いう問いに対し、母親たちは、小学校中学年まで、小学校卒業まで、第一子が小学校卒業まで、中学2年生まで、大学卒業まで、結婚までと答えた。

子育て期の区切りに関しての理由は、それぞれが持つ親役割観と関係するものであった。小学校中学年まであるいは中学2年生までを区切りとしたものは、自立して生きていく力をつけること（生活習慣を身につけさせる、自己肯定感を持たせる、自主性を育む、社会性を持たせる）を大切にしたいと考えていた。つまり、基本的な生活技術や生きる姿勢を伝達する役割が親にあると考えていた。

また、大学卒業まであるいは結婚までを区切りとしたものは、話を聞き共感するなど精神的支えや、精神面、経済面での支えを担うことを重視していた。そして、子育て期を小学校卒業までとした母親も、「子どもが求めるうちは十分に要求に応え続ける必要がある」とした。

協力者たちは、小学校中学年まで、あるいは中学校卒業までは、基本的な生活技術や生きる姿勢を伝授する役割を担い、その後大学卒業か結婚するまでは、精神的、経済的に支える役割があるという共通した親役割観を持っていると考えられる。これらから、実際には子育て期の区切りは非常に曖昧なものであるとわかった。この区切りの曖昧さが、母親の将来への考えにどのような影響を及ぼすであろうか。5. 将来の項でさらに検討する。

**子育て観** 母親の持つ子育て観は、基本的な生活技術を備えた上で、自主性を持ち自立して生きていく、個性を伸ばして生きることであった。この子育て観には、今までに自分の親から受けてきた子育てや自分自身の人生に対する思いが関与していると考えられる。わが子がより良き人生を歩んでいけるようにサポートしたいとする母親たちの思いが溢れ

ている。また、同時にこの子育て観は、母親自身が歩みたい生き方を示唆するものではないだろうか。5. 将来でさらに検討していく。

#### (5) 自分の人生における子育ての意味

「子育てのある人生を今どのように感じていますか？」という問いに、母親たちは、時に涙をためて感慨深げに語った。

まず、子育ては何より「幸せを与えてくれるもの」であり、「楽しいもの」であるという。また、「自然なもの。この子と会えて本当によかった」という運命的な感覚を持つ母親もいる。さらに「自分の世界を広げてくれた」、「精神的に強くなった」、「子育てをしたからこそわかる感情がある」など子育てをしたからこそという意識も含め、自分の成長のために意味ある経験だったと語った。柏木・若松（1994）は、親が「成長」と語る内容は、柔軟性、自己抑制、視野の広がり、自己の強さ、生き甲斐であることを見出している。協力者達も、幸福感と自分自身の成長の実感と共に自分の人生における子育ての有益性について説得力を持って語った。

また、子育てをしない人生と比較した語りもあった。ある母親は、就労の継続を希望していたが、第一子が1歳9ヶ月の時点で悩んだ末やむなく退職をした経緯を持つが、「自由はないけれど、自分にとってはなくてはならないもの。退職は後悔していない。子育ての時期は私がここでしか学べないものを学べべき時期だった」と語った。また別の母親は「社会からは離れたけれど、子育てを終えてからがんばってついていける。でも子育ては体験しなければわからない特別な世界だ」とした。これらの比較の語りは、子育てはライフコース選択の選択肢の一つであると母親たちに意識されていることをうかがわせる。池

本（2003）は、1960年以降生まれの世代は自己選択という権利を得ると同時に自己責任を追い、特有の生き辛さを抱え現在の子育ての状況に影響していると指摘している。有効な子育て支援のあり方を考えるために、当事者である母親たち自身のライフコース選択に対する現在の認識とそこに至る過程に注目することも必要なことだと思われる。

ここで、本論文の冒頭で紹介した一人の母親の語りを考察する。彼女は子育て役割・主婦役割を受け入れるのに強い葛藤を覚え続けた母親である。この母親の語りは、子育てという選択は間違っていなかったと現在を肯定するものである。しかし子育てを選択したことによって断念や中断、困難を受け入れなければならなくなり、池本が指摘する自己選択したが故に生じる葛藤を経験する。「とてもそうとは思えなかったですけど」という言葉は子育てという選択を当初から肯定的に捉える事はできなかったことを示している。しかし、それに劣らないものを得たと「今ようやく」語らせるものは、自己の成長の実感や幸福感の獲得により可能になった自分の人生における子育ての意味づけにあるのではないだろうか。またその獲得の過程には、子育てサポートが適切に作用した結果とも言え、子育て支援において、当事者の立場に立ち支援の内容を吟味することの重要性を示唆している。

## 5. 将来

### (1) 母親にとっての将来

将来にむけて新たな展開を語った母親は、大きくふたつの特徴に分けられた。一方は将来に向けての何らかの新しい展望をあげた母親たちである。子育て中は中断していた趣味や仕事の再開をしたいという思いや子育てや主婦の経験を経て興味関心が高まった心理学、子育て支援などの勉強や、NPO活動に



ついて語った。また、もう一方は「まだ具体的ではないので探していきたい」という母親たちである。背景として、「空の巣症候群にはなりたくない」、「子離れを前に、自分がどう生きていこうか探したい」など、子どもが目に見えて自分の庇護から離れていく実感があり、自分の将来を考えなくてはならない時期に来ていると模索し始めていた。

これらの語りから母親にとって「将来」とは「自分のやりたいことをやる時期」という意味と、「新たに自分を置く場所を見つけなくてはならない時期」という意味を持っていることがわかった。

またその他に、「今は現実の生活で手一杯で将来のことは考えられない。」とした母親もいた。そして、「私は、子どもを育てるのが自分の仕事だと思ってやってきた。退職し子育てをしてきた。だから私の仕事は、この子達を育てたって思えたらそれでいい。それに子育て中に棚上げしていた家の事もやらなくては」と、将来にわたっても子育て役割・家事役割の継続を考えていると語る母親もいた。

## (2) 母親の考える将来と子育て期との関係

仕事や勉強、趣味など具体的に「やりたいことがある」とし、将来への移行を心待ちにしている母親たちも、「子どもの様子を見て」や「家庭のことがうまくまわせるようになり時間ができたら」や「下の子どもが幼稚園に入園して帰ってくるまでの時間は自由に使える」などと移行の時期は慎重に決定したいと考えていた。子育て・家事役割は全うしたいとする意識を強く持つ。

子育て期でも述べたように、母親たちの意識の中で、子育て期の区切りは曖昧であった。「母親－子ども」という関係は、「手が離れた」としても継続していくため、区切りはつけ難いものなのかもしれない。また同時に主婦と

して子育て役割と同時に担ってきた家事役割への使命感へとウエイトを移しつつ自身の家庭内での役割意識は継続して行くことも関係していると考えられる。

ある母親は、第三子の小学校入学までと意識的に子育て期に区切りをつけ、その時を目標に具体的な復職プランを立て、子育て期から将来への準備を始めていた。この母親は、出産退職時すでにこの時期が来ることを予測していたが、自分の年齢と子どもの成長、また具体的な仕事の誘いがその決心を後押ししたという。また、「子どものために家にいるのは、ここでもう一区切りかな。でもそれ以外のところでフォローしてあげようと思う」とも語っている。子育て役割を全面的に担う生活から徐々に手を引き、ウエイトのかけ方をかえていく。このあえてある時点で子育て期と将来の区切りをつけることは、転換の始点として重要な意味を持っているようだ。

母親たちにとって、子育て期に区切りをつけることは、子育て後に続く将来への一步を踏み出すことを意味し、区切りをつけなくては、「自分のやりたいこと」が実現しにくい現状があることがわかった。また、移行の時期を定める条件には、子育て役割・家事役割との折り合いが可能かどうかという点と、ある程度具体的に「自分のやりたいこと」が明確であることが重要であった。これは、保育所などの社会的サポートを受け、仕事や就学などを両立してきた母親とは異なる感覚であり、専業で家庭に入ることを選択した母親特有の子育て期から将来への移行期の葛藤であると思われる。

## (3) 子育て観と母親自身の将来展望

**子育て期(4) 子育て期はいつまでか**で見たように、協力者は、自立し自分の個性や才能を伸ばし生きる子どもに育てたいとする子育て

て観を持っていた。このことは、自分自身の生き方の志向も示しているものと思われる。「将来」＝「自分のやりたいことをやる」という語りは、子育て役割を担う間は、子育てや家事以外の自分自身がやりたいことに対しては棚上げすべきだが、「手が離れたら…自分のやりたいことをやる」と期待を持っていることを示した。

母親達は、子ども期そして青年期を自己実現し自己充実させながら生きてきた。平均寿命が伸び、子どもの数が減った現代、子どもの扶養期間後の母親の人生は、30年になったといわれている。子育て観にあらわれるように、自立し個性や才能を伸ばし生きるという志向を持つと思われる母親達に対して、将来への展望をも視野に入れた子育て支援の必要性があると考えられる。また、ある母親は、幼稚園の母親集団の中で、自分には子育て以外にもやりたいことがあるという思いを表明しにくいとも語った。それは、幼稚園の母親集団が、自分の一義的役割は子育てや家事であると自認する専業主婦が大多数であり、幼稚園自体もそれを暗に強化するメッセージを発することがあるためとも考えられる。子育て期にある専業主婦の母親たちは、子育て・家事役割に違和感を持ったとしても、自分自身の将来展望を持ったり、それに関わる何らかの葛藤を抱えたとしても、それを表明し分かち合う場を得にくい状況があると思われる。この状況についても、支援を考える上で考慮すべきである。

#### 注

- 1) 名古屋市において、公的機関による支援事業は以下のように策定、実施されている。2004（平成16）年に制定された「次世代育成支援対策推進法」に基づき、「次世代育成支援対策」を推進するために2006年「なごや子ども・子育てわくわくプラン（名古屋市次世代育成行動計画

2007～12年）」が策定された。その主な具体的な事業内容には、「のびのび子育てサポート事業」「758キッズステーション」「子育て相談窓口」「子育てサロン」「保育所子育て支援事業」「産後ヘルプ事業」「幼稚園での子育て支援事業」「つどいの広場事業」「地域子育て支援センター」「わくわくキッズナビ」「トワイライトスクール（放課後学級事業）」「地域ジュニアスポーツクラブ」「学童保育（留守家庭児童健全育成事業）」等がある。

- 2) 地域での子育てを支援するため、会員組織をつくり、子育てを支援して欲しい人と手助けをしたい人の登録・仲介などをする事業である。報酬は、平日の7時～19時は1時間800円、土曜・日曜・祝日・年末年始及び時間外の場合は1時間1000円である。
- 3) 親子の交流や育児の情報交換などを行う子育てサークルの活動を支援するため、児童館において活動場所を提供する事業である。
- 4) 保健所が育児不安の軽減をはかるため、子育て交流の場を開設することにより、子育て情報の交換や仲間作りを推進する事業である。名古屋市守山区においては、市が委嘱した主任児童委員などのスタッフが中心になって学区のコミュニティセンターや集会所で隔週実施している。初めての満1歳未満児を持つ親子対象である。
- 5) スキンシップによるベビーマッサージと自然な運動発達を促すためのエクササイズである。日本マタニティビクス協会によると、現在全国の約100箇所の産婦人科やスポーツクラブで取り入れられているという。

## 2 母親のライフコース選択と子育て意識に関与する社会的・文化的条件

協力者達の語りから、母親のライフコース選択や子育て意識に関与する社会的・文化的条件は、以下の4点であることが見出された。

- (1)高度経済成長期の影響を受けた両親の子育て、(2)女性の権利理念の保障への社会の流れ、(3)理念に基づいた制度と現実社会のギャップ、(4)家庭の事情である。

### (1) 高度経済成長期の影響を受けた両親の子育て

研究協力者達は、高度経済成長期の影響を受けた両親の子育てが自分のライフコース選択や子育て意識に関与していると考えている。

父親は稼ぎ手役割を担い、母親は専業主婦やパート勤務、内職、フルタイム勤務であったが、子育て・家事役割を全面的に担っていた。協力者は、おおむね自分の受けた子育てに対して肯定的受けとめをしており、また、母親がパートタイム勤務あるいは内職をしていた場合には、子育て・家事役割の二重役割は「大変そう」「心に余裕がない」など母親自身に負担であるという印象を持っていた。これらのプラスマイナス両面の両親の姿が身近なモデルとなり、母親は子育て・家事役割を、父親は仕事役割を担うべきという意識が強化されていったと考えられ、ライフコース選択や子育て意識に関与していると思われる。協力者達は、退職し子育て・家事役割を担う選択をした。

### (2) 女性の権利理念の保障への社会の流れ

協力者達が生きてきた時代は学校教育・家庭教育・制度においても特に女性の権利理念保障への社会の流れがおきる大きな変化の時であった。

1985年に日本が「女性差別撤廃条約」を批准し、女性差別を排除するための国内法や制度の整備や改正（国籍法改正、男女雇用機会均等法制定、男女共通必修家庭科への転換）が行われた。この頃協力者はまさに青年期を迎え、新しい社会の動きを感じ取ったに違いない。

### (3) 理念に基づいた制度と現実社会のギャップ

女性の権利の保障理念に基づいた制度が整備される中、現実社会である職場の事情は旧

態依然としており、職場の戸惑いや混乱があったことが母親の語りより明らかにされた。その背後には、人々の中に根付く性別役割分業観の存在があると考えられる。また、それは職場環境だけではなく、友人、親、家族など社会を構成する人々の中にもあると考えられる。

### (4) 家庭の事情

経済的な制約などの家庭の事情が、進学や就職といったライフコース選択に影響を与えていた。

また、子育て期も就業の継続を望んだ母親たちが継続を断念した要因として、夫が、基本的に子育て・家事役割は母親が担うという規範を持っており、夫の子育て・家事協力が得られないという状況があった。夫の意識もまたライフコース選択に関与する家庭の事情の一つである。

## 3 子育て期において母親が持つ困難や戸惑いの内容

協力者が語った子育て期に持つ困難や戸惑いの内容は、以下の5点に大別された。それは、(1)子育てそのもの、(2)二次的なもの、(3)役割間の葛藤、(4)家庭の形成に伴う葛藤、(5)その他であった。母親の持つ困難や戸惑いの内容と特徴について述べる。

### (1) 子育てそのもの

子育てそのものに関する困難や戸惑いには、子育て方法のわからなさや子育ての負担感（物理的・精神的）があった。

初めての子育て、きょうだいの子育て、発達障害を持つ子どもの子育て方法のわからなさがあがり、初めての子育て、きょうだいの子育てによる子育ての負担感があったとした。

母親達は、この子育て方法のわからなさや子育ての負担感を同時にあげ、さらに長期に渡る戸惑いや困難として切実に語った。

これらのことから、子育てそのものに関する戸惑いや困難は、母親に集中しており、現状では子育て役割は母親に偏っていると言える。

## (2) 二次的なもの

二次的なものとは、子育てに関わることであり、二次的に派生する困難や戸惑いである。二次的に派生すると思われる困難や戸惑いには、孤独感、行動の制限があった。

母親は、子どもと向き合うのみの生活、戸惑いや困難を他と共有できないこと、転勤・転居に伴う生活基盤の不安定さ、発達障害に対する周囲の無理解による孤独感があったとした。また自由に行動できないという行動の制限があったとした。

## (3) 役割間の葛藤

母親は、結婚し出産したことにより新たな役割を担うことになった。個人としての自分に、主婦としての自分、母親としての自分等が加わる。母親が子育て期に持つ戸惑いや困難の内容には、その複数の役割間の葛藤に関するものが多くあった。

母親は、主婦役割・母親役割の受け入れ難さ、自分の将来に対する見通しの持てななさ、また、就業時には、仕事と家庭生活の両立の葛藤という、個人と主婦・母親役割間の葛藤があったとした。また、行動の制限があり個人と母親役割間の葛藤があったとした。さらに、子育てと家事の両立に戸惑うこともあり、母親と主婦役割間の葛藤があった。

これらから、役割間の葛藤は母親の中に、より多様な形で存在し、特に個人としての自分が母親や主婦に統合されず、独立した自己充実感や将来の見通しが得られにくい状態が

慢性的にあるという特徴があった。

## (4) 家族の形成上の葛藤

母親は、実の親との関係（関係の変化）と夫の親との関係（関係の構築）、また夫婦の関係（協力関係構築）上の戸惑いや困難があると語った。

母親は結婚して1年から5年後に子育て期に入り、生まれ育った家族を離れ、新しい家族を形成し始めた。双方の親との関係や夫婦の協力関係の構築途上の問題など、母親は新しい家族の形成上の葛藤を抱えていた。

以上の結果から、母親は、孤独感や、役割間の葛藤など、個人としての存在に関わる深刻な問題を抱えていることが明らかになった。

## 4 母親がライフコースに子育て役割を組み込んでいく過程を支えたもの

母親は結婚によって、妻役割を、また妊娠出産子育てによって親役割を取得していく。岩上（2003）は、個人は「役割」を選択し、様々な「役割」を取得し、それらを演じながら一生を送るものであり、ライフコースは個人の絶えざる「選択」の積み重ねの過程であるとしている。

協力者が子育て役割を選択し、実際に自分のライフコースに組み込んでいく過程を以下の10点が支えていた。それは、まず子ども期・青年期における(1)モデルとしての両親である。また、結婚・妊娠期においては、(2)親としての意識を高めたもの（妊娠期）があった。そして、子育て期においては、(3)子育て方法・知識、(4)身近なモデル、(5)親としての意識を高めたもの（子育て期）、(6)子育て負担感の軽減、(7)日常的な子育て・家事サポート、(8)緊急時の子育て・家事サポート、(9)就



労時の子育てサポート、そして(10)精神的な支えであった。

以下、各項目について特徴を述べる。

#### (1) モデルとしての両親

子ども期、青年期において、協力者は、育てられる存在であった。母親達は、自分の受けた子育てを断片的ではあるが、プラスイメージの事柄もマイナスイメージの事柄も、印象深い出来事として鮮明に記憶していた。そして、両親の子育てをモデルにしながら、子どもにとっても自分にとってもよりよい人生を歩もうとしていた。また、両親の子育ての背後にある社会的文化的影響も関与していると考えられる。

#### (2) 親としての意識を高めたもの（妊娠期）

結婚・妊娠期において、個人差はあるが母親は、親としての意識を高めている。母親は、結婚の決断時にすでに、結婚後はやがて妊娠し、子育て生活に入るという構えを持っていた。全員が望んだ妊娠であった。そのため、妊娠の事実や出産準備を経て、さらに親としての意識は高められていった。

#### (3) 子育て方法・知識

子育て期に入ると、子育て方法や・知識を得ることが、初めての子育てをする母親にとって重要であることがわかった。母親たちは、育児書・他の本、子育て仲間・先輩、公共的な場におけるサポート、親、きょうだいから得た。また、自分自身の子育て経験もまた助けとなった。

#### (4) 身近なモデル

母親たちにとって子育て仲間や先輩が子育てをする姿を見る事は、身近なモデルとして重要であった。また、自分の子どもより少し

年齢や月齢が高い子どもの姿を見ることも、子育ての見通しを持つことができ有益だった。

#### (5) 親としての意識を高めたもの（子育て期）

母親にとって、子育て期において子どもの存在や子どもの成長が、親としての意識を高めるものであった。

#### (6) 子育て負担感の軽減

母親たちは、多かれ少なかれ子育てに負担感を持っているが、子どもの存在や、子どもの成長する姿にねぎらわれ、また、自身の工夫と知恵によって自ら軽減していた。

#### (7) 日常的な子育て・家事サポート

核家族であるため、母親たちは、日常的な子育て・家事サポートは夫から受けるとした。しかし、夫の就労により、サポートは帰宅後や休日に限られていた。この面では地域や公共的なサポートは受けていなかった。

#### (8) 緊急時の子育て・家事サポート

緊急時とは、子どもの入院、自分の病気や入院、受診や講座の受講の場合である。母親達は、親・きょうだい、夫、子育て仲間や公共的な機関（託児施設など）にサポートを受けた。

#### (9) 就労時の子育てサポート

インタビュー時点では専業主婦であるが、出産後も仕事を続けたケースもあった。その就業時の子育てサポートについては、親、きょうだい、保育所、夫をあげた。

#### (10) 精神的な支え

母親達は、精神的な支えを夫、親、子育て仲間、中学、高校、大学時代からの友人や先生、また信仰から得ていた。個人としての精

神的な充足感が重要であり、特に専従で子育て役割を負う母親が必要としているものであることが明らかになった。

これらのことから、子ども期、青年期、結婚・妊娠期、子育て期の各期に支えがあり、母親が、それらを支えにしながら時間をかけ、ライフコースの中に子育て役割を組み込んでいくことがわかった。身近なモデルの存在、親としての意識を高める機会、子育ての方法や知識に伝授、家庭の内外からの適切な子育て・家事サポート及び精神的なサポート、子育て負担感の軽減の必要性があることが明らかになった。

## 【総合的考察】

ここでは、まず本研究の知見を列記し、現在の子育て支援策の課題を提起する。そして最後に本研究の成果と本研究の限界と今後の課題について述べる。

### 本研究の知見

- 1) 本研究の協力者は、成長期を性別役割分業家庭で過ごした。男女平等の理念は社会に広まっていたが、職場等において歴然とした男女の不平等が残る等、子ども期・青年期を通し、相反する二つのメッセージに接してきた。それは、母親のライフコース選択や親役割観、子育て観に複雑な影響を与えたと思われる。
- 2) 現代の日本の子育て状況には、先行研究の指摘と同様、「根強い性別役割分業観の存在」、「都市化による地域機能の衰退」、「核家族化による母親の子育て学習機会の乏しさ」などがあり、これらが「社会から孤立した母親による育児」という厳しい状況を余儀なくしていた。依然と

して育児不安が起これる状況にあるといえる。

- 3) 協力者の語りから、子どもが小さいうちは子育てに専念し、将来は再就職や勉強、趣味など自己実現のための生活を望むタイプのライフコース観が明らかとなり、母親たちが仕事と育児の両立支援中心の施策に対しては違和感を持つことがわかった。
- 4) 榎田・諏訪（2002）の指摘と同様に、子育て期にある母親は、子育てに直接関係することに加えて、多くの領域での戸惑いや困難を抱えていた。特に、個人としての自分と、母親あるいは主婦としての自分という役割間の葛藤を強く感じており、精神的に揺れやすく、深刻になりやすい状態であった。
- 5) 子どもが4～5歳に成長すると、母親たちは、来るべき課題として、自分自身の将来について意識するようになった。しかし、将来への期待感を持つが、何をすべきかが明確化できないことや、実際には子育て期に区切りがつけにくいなどにより、将来への具体的見通しが持てず、漠然とした焦りと不安を感じ始めていた。
- 6) 母親にとって、自分のライフコースの中に子育て役割をいかに組み込んでいくかは、大きな課題であることがわかった。
- 7) ライフコースの中に子育て役割を組み込んでいく過程には、多様な「支え」が存在した。その「支え」として子ども期に経験した両親の子育てがモデルとして働くが、青年期には特別なものはなく、妊娠期と子育て期に多様な支えが働いていた。
- 8) 母親は、厳しい子育て期の状況に甘んじる受動的な存在ではなかった。子育てネットワークを結んだり、子育て負担感の軽

減の工夫をするなど主体的に行動を起こしていた。子育て役割を果たそうとする姿は、母親・父親が子育ての主体であることを改めて確認させるものであった。しかし、子育てを取り巻く状況下では親の努力だけでは限界がある。当事者の主体的行動に加えて適切な「支え」を得ることが、子育てに重要であるといえる。

- 9) 「支え」には、直接的な子育て行動から得られるもの、家族・親族関係の中から得られるもの、家族・親族外の社会的人間関係の中から得られるもの、公共的サポートによって得られるもの、そして信仰によって得られるものがあった。子育て当事者である母親と父親による子育てを中心とし、家族・親族は何をし得るのか、また社会的人間関係は何をし得るのか。それらを支える公共的サポートは何を支援すべきなのか、子育ての主体である母親と父親の実態を理解し、有効な支援の内容を吟味すべきである。

## 本研究の成果

ライフコースの視点に立って、子育て当事者による生の語りを分析した本論文の成果は、以下の4点にまとめられる。

- (1) 個々の母親の成育史が、ライフコース選択や子育て意識に関与する可能性を示唆したこと。
- (2) 子育て世帯の家庭生活の詳細な状況と具体的課題を母親の視点に立ち解明したこと。
- (3) 親のライフコースの中での子育ての位置づけ方の重要性を実際に提示したこと。
- (4) 母親のライフコースを視点に入れた子育て支援のあり方を検討する必要性を確認したこと。

## 本研究の限界と今後の課題

本研究の協力者が限定的な小サンプルだという限界がある。本研究は専業主婦家庭に対する子育て支援のありようを検討したが、協力者が専業主婦家庭を代表するとはいえない。協力者が特定の幼稚園の保護者のうちで自分の経験を自発的に語ろうとした母親であったことで、結果に何らかのバイアスが生じた可能性がある。

さらに、専業主婦家庭を対象とした本研究の知見を、子育て世帯全体に一般化できない。全ての子育て世帯に対する有効な子育て支援策を構築するには、共働き家庭、単親家庭、外国籍家庭も含め、多様なサンプルによる検討を経る必要がある。

本研究は、2007年時点の子育て世帯を対象とし、1960～70年代生まれの母親のライフコースを辿った。今回の対象者は、高度経済成長期の影響の下で子育てを受け、女性の権利保障の理念が制度として確立し始めた時期に成長し、バブル経済期という特別の時期を経験して、子育て役割を担った。これらの時代の特徴が彼らのライフコース選択や子育て意識と行動にどのような影響を与えたのかに関する本研究での考察がどれほど妥当であるかは、違った時代的背景の下で育った世代の人々と比較するコーホート分析を経なければならない。

父親自身による語りは協力者数が少なかったため、本報告では省略した。両親のデータをセットにして分析することによって、有用な情報獲得が期待できるが、今回の研究では果たせなかった。

日比野(2011)は、入園前の子どもに対する子育て支援プログラムの改善経験を報告した。それに親のライフコースの視点を入れて子育て支援に活かすことが、筆者の現在の課題である。

## 付記

本研究は、金城学院大学大学院人間生活学研究科博士課程前期課程修士論文（2007）を加除修正したものである。

## 文 献

榎田二三子・諏訪きぬ, 2002, 「子育て支援のあり方の再検討—育児ストレスと育児期ストレスの視点から—」『保育学研究』, 第40巻第1号  
榎田二三子, 2004, 「母親の主體的生き方に関する一考察—家庭で乳幼児を育てる母親への子育て支援の課題」『武蔵野女子大学短期大学部紀要』第5巻  
原田正文, 2006, 『子育ての変貌と次世代育成支援』名古屋大学出版会  
日比野直子, 2011, 「子育て支援プログラムの項か向上に資する要因の探索—幼稚園での実践に基づく考察—」『金城学院大学論集 人文科学編』第8巻第1号  
池本美香, 2003, 『失われる子育ての時間』勁草書房  
岩上真珠, 2003, 『ライフコースとジェンダーで読む家族』有斐閣  
柏木恵子・若松素子, 1994, 「親となることによ

る人格発達：生涯発達の視点から親を研究する試み」『発達心理学研究』第5巻第1号：72-83  
経済企画庁, 1997, 『平成9年 国民生活白書』  
小坂千秋・柏木恵子, 2007, 「育児期女性の就労継続・退職を規定する要因」『発達心理学研究』第18巻, 第1号  
牧野カツコ, 1982, 「乳幼児をもつ母親の生活と＜育児不安＞」『家庭教育研究所紀要』No.3  
森下順子・森下正康, 2006, 「幼児の気質が母親の行動特徴と養育態度に及ぼす影響」『和歌山大学教育学部紀要 教育科学』第56集  
名古屋市, 2012, 『「子ども・子育て新システム」への対応に向けたニーズ調査結果報告書』  
内閣府（編）, 2005, 『平成17年度版 国民生活白書』  
大日向雅美, 1988, 『母性の研究』川島書店  
天童睦子, 2004, 『育児戦略の社会学』世界思想社  
諏訪きぬ・戸田有一・堀内かおる, 1998, 『母親の育児ストレスと保育サポート』川島書店  
Thomas, A. , & Chess, S. , 1977, Temperament and development. Brunner/Mazel.  
徳田治子, 2004, 「ナラティブから捉える子育て期女性の意味づけ：生涯発達の視点から」『発達心理学研究』第15巻, 第1号